ぬ。併し、一度び委託を受けた以上は、自分の其の全責任を負ふだけの覺悟を有つ必要があると思ひます。それには、これに相當するだけの學識なり、體格なり、技能なりを有つことは勿論大切でありますけれども、それよりも、もつと大切な根本的の資格としては、先づ高潔な人格、即ち道德上の修養を積み、智德を磨いた人であつて、且つ益々其の修養に怠らない人であることが必要であります。

殊に幼稚園の保姆は、今の處多くは齡若い女子の人々がこれに當つて居らるゝ有樣でありますから、繰り返して申し上げて置き度いと思ふのは、道を修むるは、今であると云ふことであります。勿論、年老いた後には、道は修められないものだとは申しませぬけれども、然し身體發育の時機に於ける修養は、一番身につくものであります。殊に人格の修養と云ふとは、單に保姆としての資格の上に必要なばかりではなく、個人としての自己を作る上にも、是非修めなければならぬ道であると云ふことを忘れてはなりませぬ。（談。文責在記者）

小兒畫家ラルソンの話

菅原敎造

日なたの家

今日は小兒畫家ラルソンのお話をして見たいと思ふ。ラルソンは今年六十歲で、スウェーデンに現存して居る大家である。ストックホルムで生れた人で、やはり其處に住んで居るけれども、春から秋にかけてスンドボルンと云ふ田舍の別莊へ

一家をあげて越して行く。そして此のスンドボルンに於ける自分の家族の生活の樣を、美しい水彩畫と輕妙なエッチング、とに寫生し、これにラルソン獨特の美文で說明を附して、明治三十二年から四十三年にかけて、四冊の繪本をストック ホルムで出版した。この內の二冊から拔粹した繪本が三年程前に獨逸で出版された。この本は……

書　者　Lar-son.(ヨルソレ)
書　名　Das Haus in der Sonne.(日なたの家)
發行所　Karl Robert Langewiesche. Leipzig.
定　價　上製一圓五十錢　並製九十錢

今日の話は、總てこの本の頁數により、總てこの本の挿畫によつて、一々細かに說明をして行くのであるから、讀者諸君は豫めこの本を御求めなされる方が御便宜である。丸善(日本橋通三丁目)や、ガイゼル、ウント、ギルベルド社(神田鍛冶町)に御注文に成れば三月ばかりで着する。

この繪本に關しての精しいことは追々御話するとして、先づ第一に讀者諸君にこの本を御求めになる事を御すゝめしたい。子供のある家庭、子供を敎へ育てる職にある方、子供に興味のある人々は固より云ふまでもない事であるけれども、子供のない家庭、子供に就いてあまり平常から御考へにならない方には、又尙さら御すゝめして見たいとも思ふ。この繪本を御取り寄せに成つて、七十餘の水彩畫やエッチング(エッチングとは銅版に臘のやうなものを引いて、其上を鐵の尖筆で畫をかき、これを硝酸の液にひたすと、畫いた所丈けが腐蝕する、この凹んだ所へインキを入れて印刷するものである)を御覽になれば、春の日が照りはえて、綠の草や美しい花が輝やいて居る國に遊んで居るやうな樂しい心持になる。

子供を畫いた繪もいろ〳〵あるけれども、ラルソンほど數も多く、變化のさま〴〵な繪を畫いた人はない。子供を畫いた繪もさま〴〵あるけれど

もラルソンの繪ほど形式と內容と、卽ち畫き方、線や色や光線の表はし方と、繪に畫いた子供の有樣とのよく調和した畫は餘り多く見受けない。

スウェーデンと其繪畫

スウェーデンは非常に優美な國で、例を求めるならば近所のデンマークよりは、むしろ却つて遠方のフランスに似て居る。デンマークの主府のコーペンハーゲンへ行つて見れば、溫良な、從順な平和な、何となく小都會的の單調な傾があるけれども、之に反してスウェーデンの主府のストックホルムへ來れば浮華、絢爛、豪奢、化粧の艶麗、磨き拔いた濃かい味のある社會的生活等が見られる。デンマークと云ふ國は沈點の島にでも行つたと云ふやうな土地で、且田園生活的の國である。之に反してスウェーデンと云ふ國は大世界の幼い時代と云ふ面影があつて、この國の人はかひ〳〵しく働き、すら〳〵と延びた、彈力的にはづんだ生活をして進んで行く。言語は朗々として澄んでフランスの北部らしい響がある。この國の人の同情は悉くフランスに集まつて居ると云ふ事が大なる特徵で、從つてこの國の人は藝術に於て亦北方の巴里人である。

デンマークの繪は何となく小市民的で悲哀で且つ質樸である。畫工の新らしい技巧と云つても、要するに其濃やかな愼ましやかな趣味、其和らかな感覺を發表するに過ぎ無いので、其畫く所も古いオランダ畫工のやうに、古いソファーや、ゆるく打つ時計や、柔かい空氣や、らんぷの光の朦朧とした室を畫くに過ぎない。さうでなければ男が本を持つてテーブルに腰をかけ、子供が學校の復習をし、娘がピアノを彈じて且つ歌つて、小さい暖爐には石炭が燃えてる所なぞを畫くに過きない。極めて平凡である。

スウェーデンの繪は老熟した高貴な世間的の人

と云ふ面影がある。優美で、燃立つてるやうで、且つ精練した、官能的な、氣儘な新らしい試みを力める實驗的なやり方をする。巴里へ研究に行つた若い畫工は、直ぐに技巧家にならうと力める。そして極めて大膽に外光の最終の問題を捕へやうと勵む。デンマーク人のやうに愛らしい優さしい所や、人を動かすやうな濃かい感情はないけれども、スウェーデン人はつまり是れと云ふ大なる特徴のない所が、やがてコスモポリタンと云ふ大きい味のある所である。つまりは精練した巴里人を通りこして、近代精神の前列に出やう出やうとする氣概が見える。スウェーデンの畫の色彩は流れるやうな撓み勝ちな魔力があり、人の神經をえぐるやうな優美な閃めきがあつて見る人の眼を奪ふ。

デンマークの畫家は十九世の半頃迄、其國丈けに止まつて世界の舞臺に出なかつたけれども、スウェーデンの畫家は十八世紀に於て既に歐洲の藝術史の一角を占めた。

現今では世界の大家として有名な人が澤山ある、中でも小兒畫家ラルソンは最有名な人である。

ラルソンと其作品

一八七〇年より一八八〇年（明治三年より十三年）の間に、スウェーデンの美術家は非常なる發達を遂げて、藝術上の印象を深く世人に與へた中でも、畫家であり且つ詩人であるカール、ラルソンは最も多方面の人で、且つ其畫才詩能を最も世に知られた著名な人である。彼は新らしい試みを進めて飽くことを知らず、不朽な創作力を貯へて畫界の新領土を開き、今年六十歳にして尙且つ豐富な樂天的な作品を多く試みて居る。此の人は滑稽畫の說明者として筆をとつて最初に名を爲した人で、彼の有名なる文章や滑稽畫は十九世紀のスウェーデン畫壇の最も偉大なる產物で有つた。ラルソンの畫は運動的で、快樂的で、遊びずきで、

延びた、氣儘な、自由な才能がある。彼の畫くものは悉く輕い。この製作が輕易であると云ふ事は、後年までも續いて居る彼の特長である。

今述べたやうに、ラルソンは常に新らしい試みを爲し、新しい畫き方の先驅者であつた。初め油繪を畫き、次に水彩に移り、又パステルをも試み彫刻も出來るし、エッチングにも巧である。ラルソンがフランスで畫いた水彩畫は、なりたての果物のある小さい庭、いろ〳〵な色の花、老人、蜂の巣などで有たが、追々この水彩畫でストックホルムの郊外やダラルネ地方の和かい景色、太陽の光線の照り渡つてる室内、自分の家族の樂しさうな肖像等を畫くやうに成つた。又彼のエッチングの畫き方と云ふものは、彼の機智、彼の輕妙の畫才、彼の畫の特長を語つて居るもので、讀者は私の推薦した繪本に於て、彼の水彩畫とエッチングをかなりに味ふ事が出來る。

ラルソンは近代のスウェーデン藝術家の中でも子供の心を以つて居る唯一の人である。彼は純粹のストックホルム人である。彼の藝術は彼の人物の如く快活で、輕易で、且つ陽氣で、しかも尙絢爛たる裝飾的な味はひがある。又彼の繪は淸新で、若々しく、そして絶えず暖かな、にこやかな心情がこもつて居る。斯の如き感情の有りのまゝの且つ直接の表出と云ふものは、最初に述べたやうにダラネル地方ファルン市に近い、スンドボルンに於けるラルソン自身の家の家族生活、卽ちスウェーデン風の木造家屋の内外の有樣、及びブロンド色の髮と靑い眼の彼の家族の肖像や活動などを畫いた畫集四冊に十分示されて居る。この畫集をひもといて見る人は、恍惚としてラルソンのやうな人物になり、ラルソンの畫のやうな精神になり、淋しい心も、憂鬱な情も、この繪本の爲めにおのづと暖かに延びやかに開いて、善と美と喜びとに

充ち溢れる。實に畫家たり詩人たるラルソンが幸福なる家庭の愛の生活を語るものはこの畫集である。

第一の畫集は明治三十二年に出た「家」と題する本で、色刷の繪が二十四枚あつて定價十三マーク半（一マークは我五十錢位）

第二は明治三十五年に現はれた「ラルソンの家族」と云ふので、色刷の繪が三十二枚で十七マーク。

第三は明治三十九年に發行した「我郷にて」と稱する繪本で、色刷二十四枚、十七マーク。

第四は明治四十三年に出版した「日なたにて」と云ふ書で、色刷三十二枚、二十二マーク。

私が推薦した拔粹でなしに、原書を御取寄せにならうと云ふ方の便宜の爲めにと四冊の名を掲げる。

1 Ett Hem. (Ein Heim)
2 Larssons. (Die Familie Larsson)
3 Spadarfvet. (Beiuns auf dem Lande)
4 At Solsidan. (An der Sonnenseite)

括弧に入れたのは、本の名の獨逸譯である。

右の本の發行所は Stockholm 市の Albert Bonnier 書店で、丸善でも、ガイゼル、ウント、ギルベルト書店でも取寄せられる。いづれもスウェーデン語で、ラルソンが美しい文章の說明をつけある。

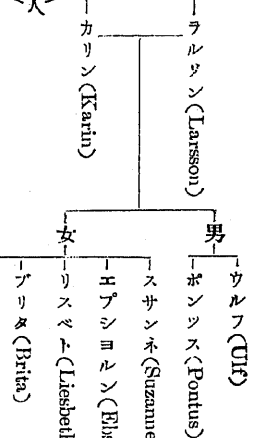
私の推薦した「日なたの家」と云ふ繪本は、拔粹とは云ひ乍ら、材料も整頓して居るし、全躰も善く纏つて居り、又複製した色刷も、飜譯した說明の文も共に心をこめたものである。今日は卽ちこの本に就いて御話をする次第である。

又ラルソンの繪を繪葉書にしたものは München 市の G. Hirth 書店發行の「Jugend-Postkarten」の中にある。

ラルソンの家族の肖像

これから「日なたの家」と云ふ本のページ數に從つて、ラルソンの家族の肖像、卽ち家族の人々はどんな顏付きをして居るかを先づ御目にかけて、一人〳〵の顏の特徵や表情の印象を心に留めて置いて頂いて、後に家族の有樣を御話する時に、「アー此の子は、あんな顏の子供で有つた」と云ふ風に、御思ひ出しを願ひたいと思ふ。

ラルソンの夫人はカリンと云つて、二人の間には、男が二人、女が五人、卽ち七人の子供がある。それからラルソンには阿母さんがあり、夫人のカリンには阿父さんがある。尙カリンの阿父さんに姉さんが二人ある、しかし阿父さんも二人の姉さんも說明の文には出て居るけれども、繪には表れて居ない。この人々は次の簡單なる系圖には〔〕に入れてある。



右の表に從つて、これから一人々々說明して行く。

ラルソンは頭は禿げて、地藏眉で、眼は優しく細く、眼鏡をかけて居る。鼻は非常に高く、殊にポンチ繪にはこの鼻が大なる特徵と成つて居る。ひげは白く成つて鼻の下と顎とに延びて居る。優しい、氣輕な、輕妙な態度や性格が十分にうかゞはれる。

十六頁の右側の色刷の繪は、ラルソンがブリタを頭の上にのせて立つて居る所が描いてある。黑

い上衣の裏の赤いのも先子供らしくつて嬉しく、優しい眼がいと〻細く成つて居るのは、多分今までかけて居た眼鏡を外した爲であらうか。この室は恐らくはラルソンの畫室の一部であらう。棚の上の人形の日本出來らしいのも吾々に一入の興味を起させる。尙ラルソンの顏の特徴を滑稽畫にして示したものは、二十一頁と六十八、六十九、七十頁とに出て居る。

カリンは眼も大きく鼻も順當で口も愛らしく、一つ〳〵見れば皆それ〴〵美しい形であるけれども、眼と眉とがせまつて居るのと、全體の表情が何處となしに浮かないので、眞面目過ぎた、ぎごちない、病身らしい感じを與へる。

十七頁の左側の色刷の繪は、寢室の朝（時計は八時二十五分）である。カリンは末子のケルスチを起して、着物を着せて、これから他の室へ伴れて行かうとして居る所である。尙カリンの肖像に就いては後に精しく項を別にして述べる。カリンの顏の特徴を滑稽畫にしたものは、二十一頁、六十一頁、六十八—七十頁に出て居る。

十三頁に出て居る四人の子供の肖像を畫いた壁畫の左がウルフで右がボンツスである。ウルフの方が少しきつく、ボンツスの方は少し優しいけれども、大體はよく似た兄弟である。眼も阿母さんに似てパッチリして形が良く、口も非常に愛嬌がある。鼻はウルフの方が少し丸く、ボンツスの方が寧ろ格好が良い。たゞボンツスの方が少し眉をひそめる癖がある。五十五頁のリサと云ふ馬に乘つた子供はウルフである。五十頁の木の下に立つて居る子供も恐らくはウルフであらう。四十六頁のクリスマスの朝の畫には二人とも出て居る。寢台の上に立つて居るのはボンツスである。又六十六頁の右の隅に寢て居るのもボンツスである。この二人の顏の特徴を滑稽畫にしたのは二十一頁に

示してある。左がウルフ、右がボンツスである。

スサンネは總領の娘で、小ない時は阿母さんの眼口鼻を一層美しく且つ整頓した顏で、怜悧さうな、きりっとした、冴えゝした表情を示して居る。十三頁の四人の中の上のがスサンネである。これと同じ顏が五頁(九頁から繰り上げて行つて)の花束を持つて居る畫にも、三十七頁の糸取り車にも、三十九頁の阿母さんのお祝にも、四十五頁の活人畫にも、五十三頁の天使の假裝にも、六十六頁の寢室の畫にも出て居る。この娘の顏の特徴を滑稽畫にしたのは、二十一頁と六十一頁(左から三番目)とにある。

スサンネが十八歳の時の肖像は三十三頁の左側の色刷の繪に出て居る。小さい時と較べるとよほどおっとりした顏に變つて來た。この繪の配色を注意して見れば優にラルソンの裝飾的の手腕を認める事が出來る。吾々に取つて快い繪である。三十五頁の阿婆さんと子供の畫の、右の方の横向きの肖像は、卽ちスサンネの十八歳頃の顏である。

スサンネの眼をもつと細く優しくしてラルソンに似せ、口を細くしてもっと愛嬌を持たせるとエプショルンの顏が出來る。五十一頁の向日葵の花の前に立て居るのがそれである。六十五頁の左側の色刷の繪(白樺の木の下の食事)の左から二番目の子供も、四十一頁の左側の色刷の繪(名の日の祝)の右から三番目の子供も、四十六頁のクリスマスの朝の畫で人形を抱いて居る子供も皆このエプショルンである。

リスベトの肖像は非常に多い。頰の垂れさうに太つた、眼が丸く光つた、鼻の丸い、口を結んだ何となく恐らしい顏をした女の子である。眞面目に成つて居る顏は十三頁の四人の子供の壁畫の下の方に出て居る。笑つてる顏は六十二頁に、怒つてる顏は四十二頁に、寢室では五十六頁の右側の色刷

の繪に、阿母さんに體を拭いて貰つてる所は六十七頁に、魚に餌をやる所は五十二頁に、其他六十五頁の左側の色刷の繪（白樺の木の下の食事）にも出て居る。この子供の顔の特徴を滑稽畫にしたのは、二十一頁と六十八――七十頁に畫かれてある。

五十四頁の寺院の内部の畫にある子供と、六十六頁の水のほとりの畫の中央にある子供とは同じ顔である。恐らくはリスベトが少し大きく成つた時の顔ではあるまいか。若しリスベトでなければ必ずブリタである。

ブリタの肖像は十六頁の、右側の色刷の繪で、父ラルソンの頭の上に腰をかけて出て居る。又三十二頁の右側の色刷の繪（林檎の花かげ）にも出て居る。尚其他四十一頁の左側の色刷の繪（名の日の祝）の右から二番目の子もブリタである。

板畫としては、六十三頁のワッフルを食べて居る所、五十八頁の戸の前に立つて居る所、四十四頁の阿母さんに抱かれて居るところ、五十三頁のねんねをして居る所等である。ブリタは顔の肉がむちゝと肥えた、口の近處には肉の少し多過ぎる程な、絶えずにこゝしした、愛嬌のある子である。

ケルスチは開卷第一の畫（この畫は四十七頁のラルソンの畫室の上の方の左から二番目にも出て居る）と、十七頁の左側の色刷の繪（カリンとケルスチ）とで其面目を殘りなく發揮して居る。うつ向き勝ちの、上眼を使ふ癖のある、口のしまつた、阿母さんのカリンによく似て眼と眉の間のせまつた、一種特別の表情がある。四十一頁の左側の色刷の繪（名の日の祝）で花環を握りしめ乍らさげて居る子供も、六十四頁の右側の色刷の繪（音階）でピヤノを彈いて居る子供も、共にこの特徴を備へたケルスチである。

次に子供の祖母即ちラルソンの母の肖像を紹介

しやう。七頁（九頁より繰り上げて數へて）の畫は即ちさうである。この畫は四十七頁のラルソンの畫室に、カリンが腰をかけて居る處のすぐ上にかゝつて居る。三十五頁には、ラルソンの阿母さんが老年に成つた時の肖像が出て居る。

これでラルソンの家族の肖像を一々畫について精しく述べたから、次にラルソンの家のあるスンドボルンへの路案内を少し書いて見よう。

スンドボルンへの路案内

子供らしい、快活な、氣輕な、待遇好きなラルソンは、自分の家に客の來る事を非常に歡ぶ。スンドボルンは北緯六十一度あたりに位して居るから、我國で樺太の境界線が五十五度であるのに較べると、もつとずつと北である。この地方を總稱してダラルネ（谷即ち山と山の間の平地の意）と云ひ、名所としてはシリエン（眼の意味）と云ふ美しい湖がある。この地方へ來る汽車はファルンと云ふ銅山で有名な人口一萬ばかりの都會で盡きる。ラルソンの家族を訪問する客がこの町で汽車を降りると、馬車があつて家僕のヨハンと小さいよく肥つたブラウネと云ふ犬が迎ひに出て居る。やがて客は馬車にゆられ乍ら安らかに畫工の家を指して進みつゝ、ダラルネの美しい風景を心行く限り愛でる事が出來る。スンドボルンまで行くには、たか〳〵一時間と十五分を要すれば澤山である。客は馬車の中でヨハンと話をしながら、有名な神學者スウェーデンボルグの生れた土地や、有名な植物學者のリンネがサラモレアと結婚した處などを望むことが出來る。それから平つたい二つの岡を登つたり下つたりする。この近所の森は非常に手入がよく屆いて、燕麥は規則正しく美しく生え繁つて居る。心に豫猶のある人ならば、わざ〳〵馬車を降りて樹の間に腰をかけて、都會の塵に染つた眼を清めるのも興があらう。森にはやはらか

い苦がむく〳〵と生えて、活きて動き出して森の花の間に踊つて居る樣な感じがする。やがて道が下つて河に出る。このスンドボルン河は何となしに「御急ぎなさい、ラルソンの家では食事を調のへて貴方を待つて居ります」と呟やいて居るやうにも聞える。最後に車はズンドボルン橋の上をごろ〳〵と轟かす。橋の下には流が音をたてゝ、車の響に和してさゞめいて居る。河を中心とした此の土地の光景は四十九頁の左側の色刷の繪と、六十一頁の下の圖に出て居る。やがて車は古道具の山と肥料小屋の間を入つて、隣の家の庭の小さい綠の門を過ぎると、門の前にうと〳〵して居た雞が、はしなく晝寢の夢を破られる。馬車がラルソンの家の廻廊の前に止ると、カポーと云ふ犬は慣例に從がつて、一寸齒をむき出してうなつて見せる。固より慣例に從つたのみで、客に對して何等の惡意も反感もある筈がないから、すぐ客に脊を見せて、友達のブラウネに御出迎へ御苦勞と挨拶をしに行く。

此處を訪問する人は誰れでも同じ樣に、先づ第一に消火ポンプの入れてある戸棚の上にかゝつてある壁畫を立止つて見る。十三頁にある畫が卽ちこれである。此の壁畫は、スサンネ、ウルフ、ポンツス、リスベトの四人の肖像が畫いてある。そして戸の上を見ればラルソンの作つた歡迎の詩の句が書いてあるのに氣がつく。其處を入つて小さい玄關へ來ると、子供の道具がごた〳〵あるので、外套かけの所在もわからない位である。然し女中のヘレナを呼べば其の始末を何とかしてもらう事が出來る。來客はまづ此處で鏡に映つた自分の嬉しさうな顏を眺める。そして刷毛で髮の毛をなでつけ、外から汚れの付いて來た靴を淸める。扨て今度は戸が三つある內の一を撰ばなければならぬ、勿論其の一と云ふのは食堂の戸である。此の

戸を開けると、戸に「神の平和」と云ふ文字がかいてある、これからいよ〳〵平和の國に入るのである。室の中の戸棚には硝子戸がたつて、中に臺所道具がピカ〳〵して輝いて居るのが見える。膳棚の上には壺や德利が澤山並んで居る。其の内のどれか一には必ず客の好きな飲料が入つて居る筈である。戸棚の上にはラルソンの友人で有名な畫家のリリーフオルス、クリユーゲルの畫いた皿が三枚懸つて居る。扨てカリンがテーブルに白い巾を敷くと、子供達は待遠しさうに椅子の後に立つ。ウルフは、うや〳〵しく御祈をする。客が忙しい人ならば、矢張り忙しさうに食事をする。家族はそれを見て滿足をして居る。

ラルソンの家の由來

十數年前、舅即ちカリンの父とラルソンと二人で、ダラルネ地方のシリエン湖の邊りに小旅行をして、其の序でに舅の故郷のスンドボルンを訪ふことになつた。こゝには舅の所有にかゝる家があつて、年とつた舅の姉が二人住んで居た。この家は鑛滓の丘の上に建つた小さい見すぼらしい家であつたのと、他の家は皆相應に大きかつたので、此の土地の人々はこの家を唯「小屋」と呼びなして別に何等の形容詞をも副詞をも添てなかつた。北國風の丸太を積んで内外に板を張つた丈夫な田舍だての家で十頁にある畫が即ちこれである。この小家の直く近くにスンドボルン河が流れて、丁度此處で曲つてこの河は一增廣くなる。家を出ると狹い急な坂があつて、これを降りると直ぐ河である。河にはボートが一艘繫いであつて、これでも船つき場であると云いたさうな顏をして居る。スラリとした白樺の木が九本ばかり岡の麓に生へて居るのも嬉しく、家の中は總が小綺麗で、よく整頓して居る。飾道具は古風の單純なもので、此の二人の老婦人が親から讓り受けたもので

ある。

ラルソンは此の土地に來て、四邊の光景やら、家の有樣を見て、一種云ふべからざる神々しい氣高い感じに打たれて、此の大きな世界の騷ぎ、爭ひ、かしましさを離れた靜寂な生活のいみじさを泌々と感じた。ラルソンは嘗つて佛蘭西の百性家に居た時に斯う云ふ感じを、たつた一度持つたことがあるのみだと云つて居る。深く動された樣を見て舅は此の村で土地を買つて、家でも建つたらと云つて呉れたけれども、其の時ラルソンは斷然舅の忠告を退けて、かういふ田園の趣味と云ふものは、別に此の土地に來なくとも、自然に藝術家に備つて居るものであると云ふ意氣を示した。

數年經つてから、老婦人が一人亡くなつたので殘された老婦人は到底かういふ寂しい處に、一人で住んで居ることが出來ないと云ひ出したので、舅は以前のラルソンの言葉を思ひ出して、其の家を全部ラルソンに讓つて呉れた。感謝すべき此の贈物が、後になつてラルソンの家族に齎した幸福や恩惠を、この老人に示して悅ばせる事の出來ない中に、舅が亡くなつたと云ふことは、ラルソンに取つて盡きせぬ悲しみである。扨てラルソンは時と財力の許す限り、夏毎に建增をして室を殖やし、塀や坦根を造つて內外を修繕した。村の大工の鉋の響や槌の音を聞きながら、ラルソンは愉快に繪を畫いた。一枚の板でも一本の釘でも、一週間分の給料でも、實は皆苦しい溜息を値したものである。斯の如くにして遂にラルソンの思ふやうな家が出來上つた。

開卷第一にある畫は、即ち落成した家である。これを十頁の古い手入れをしない時の家と較べると非常な差である。尙この家の色を知りたい方は六十五頁と七十三頁の左側の色刷の繪を開けて御覽を願ひたい。家の內に住んで居る家族の人々が

快活であるのみならず、家の外部の色が、既に快活な陽氣な溫かい賑やかな赤い色で塗つてある。即ち內から見ても外から見てもラルソンの家は實に「日なたの家」である。

次に「日なたの家」の周圍の光景を述べる。この家を横から見た所は今の七十三頁の左の色刷の繪と、六十六頁の水のほとりと云ふ畫と、五十二頁のリスベトの畫とに出て居る。この家の裏の光景は、三十二頁の左の色刷の林檎の花かげの繪と五十頁の木の下の畫と、五十九頁の踊りの畫と、六十五頁の左の色刷の白樺の木の下の食事の繪にある。後の水に面した所は四十九頁の左の色刷の釣の繪に表はれて居る。

小兒室と畫室

さてこれからラルソンの畫室を見物しなければならぬ。畫室には舊と新と二つある。舊畫室即ち現在の小兒室の方が最も興味があるから、先づこゝへ入つて見る。三十七頁の畫を開くと中には數世紀を經過したやうな偉大なテーブルがあつたり、又少くとも二世紀は確かに經つたと思はれる大きな崇高な寄椅子がある。ラルソンは此の椅子に腰をかけながら、詩集の挿畫を澤山に書いた。安樂椅子の上を見れば、高い柱がたつて居る。この柱は繪具戸棚である。其の柱の頂上にはラルソンの畫に依つて指物師が作つた人物が、腰を掛けて居る。この人物は九頁にも出て居る。戸には夫人カリンの肖像が畫いてある。

其の後暫く經つてから、衣裳室を改良して大きな新しい畫室を造ることになつた。北の光線を一ぱいに受けるやうに、又中に大勢人が居ても、動きがとれるやうに場所を廣くとつた。これが出來てから此の新畫室を、たゞ畫室と呼びならして仕まつた。從つて古い方の畫室は其の役目を失つて仕まつて、今では子供の仕事室になつて、ウルフ

とボンツスが槌をふるツたり、鉋をかけたり、又スサンネが糸をつむいだりする。これを私は小兒室と呼んで置く。

この小兒室の正面の光景は三十五頁の大工と機織りの圖と、四十八頁の右側の色刷の繪（花に水をやる所）と、五十九頁の讀書の圖とに出て居る少し側面から見たのは二十五頁の左側の色刷の繪（將棊）にある。三十七頁の糸をつむぐ畫は今精しく述べた通りである。五十一頁の畫もやはりこの室である。殊に五十一頁の畫と二十五頁の將棊の繪とを較べて、壁にかけてある額を引き合せて見るのも興味がある。

新しい畫室は四十七頁に出て居る。この畫室は恐らくは開卷第一の畫の左の二階の室であらう。四十七頁の畫を精しく見ると、ラルソンの畫いた繪が澤山ならべてあるのが先づ注意をひく、今左側の壁から順に見て行く。第一番目の畫は恐らくはスサンネの畫いたものである。この畫にはスンドボルン河もあり、白樺の木もあり、ラルソンの家もあり、人物も居る。河が瀧のやうに上から下に流れて其河べりに木や家が横に成つて立つて居る奇觀は、後に子供の「務めと遊び」の所で説明するスサンネの畫と同じ趣向である。第二番目の畫は開卷第一の畫で、たゞ少し背景と人物との位置が違つて居るのみである。三番目はラルソンの造つた彫刻。四番目は子供が遊んで居る所、五番目は裝飾畫で、何となしに二十四頁の右側の色刷の繪（寢坊の朝飯）を思ひ出させる。

次に正面を見ると、窓の左側にやはり子供の遊んでる畫がある。窓の右側にカリンの上には、ラルソンの阿母さんの肖像が掛けてある。次に右側の壁を見る。壁の中程の上の方にかけてある畫は十三頁にある四人の子供の肖像の輪廓とそつくりであるから、恐らくはあの畫であらう。

又三十一頁にあるカリンのこの肖像も、畫室で寫生したものである。

ラルソン夫人カリン

ラルソンの家の敷居を跨いだ人は、幸に滿ち溢れて居る彼の家族に圍まれて我を忘れて恍惚としてしまう、どんな淋しい人でもどんな固い人でも。先づラルソンの苦心した此の家に、著しく人の目を惹き心を奪ふ魔力があると云ふ事は疑ひもない事實であるが、しかし彼の樂園のやうな生活の中心點は決してこの家丈けではない。

「神樣は溢れるばかりの惠を私に賜はつた、私の妻は實に天使である」とラルソンは告白して居る。彼の夫人カリンはよく家事を治め、子供を躾け育て、毎日樂しい月日を送つて居る。ブリタを抱つこして居る繪は、三一頁と四四頁とにある。シッコをさせて居る繪は三六頁にある。リスベットの體を拭いてやつて居る圖は六七頁にある。無邪氣なラルソンがこの溫良な夫人に對する態度は殆んど宗教的である。北國の夏の夕べは、夢の國がこの世に出現したやうな薄光の時間が非常に長く續く。ほの暗い畫室の隅にカリンが座つて、夢を見るやうな圓い目をあげて、愛に充ちた靜な眞面目な言葉を眼を以つて言ひかはして居る——この平和なたそがれの靜けさを、言葉を以て破るのは心なき業であるから。ラルソンは清い神々しい感に打たれて、神の懷にいだかれたやうな心地になる。

子供が寢床に入り、女中も洗濯室の隣の女中室に引き下つた後で、ラルソンはカリンと食堂に殘つて、樂しい時を送るのを常として居る。ラルソンは夫人に何か呼んで聞かせ、カリンは子供の着物のほころびや、切れ目をつくろひ乍ら熱心にそれを聽いて居る。一體衣裳室をラルソンの畫室に直した爲めに、食堂を衣裳室に代用して、使つて

居る。此の食堂は二た間の寢室と一列に並んで居るので、寢室の子供は時々眼を醒したり、御母さんの優さしい聲や、キスや、抱つこなどを要求したりすると、カリンはいそ〳〵と立つて行く。カリンの名の日の御祝（名の日の祝の説明は廿八頁にある）は、三十九頁の畫にある。ラルソンは御祝の詩を作り、それを女の子がうや〳〵しく讀まうとする。隣の部屋では、この詩の作者が、娘の朗讀ぶりに耳をすまして居る。

夫人が嘗つて大病に罹つた事があつた。四十頁の右側の色刷の繪は恢復に向つて來て、醫者がもう大丈夫と言つた時を畫いたものである。この繪本の中でも配合の最も澁い逸品である。

食事

日當り良い晴れた日には、家の後の大きな白樺の木の下で食事をする。六十五頁の右側の色刷の繪がこれである。此の木はラルソンの家族にとつては、恐らく世界中で最も良い木であらう。若し此の木がなかつたなら、ラルソンの家は極めて値の少いものになつて仕まう。非常な立派な蔭を作つてくれるので、蚊や虫なども、そんなに不愉快な感じを起させない。この木の下の右の方に、細長い机に斜に白い布をかけて、兩側にはベンチを列べる。此方側のベンチには、子供が四人、一人丈けは正面をむいて居るので、リスベトであることが知れる。後向きの二人の男の子は勿論ボンツスとウルフである。もう一人の後向きの女の子はケルスチでなければブリタである。向側のベンチには犬のカポーと總領のスサンネと、次の娘のエプショルンとがかけて居る。細長い机の兩端には椅子が一脚づゝ置いてある。右の端の椅子に腰をかけて居るのはカリンで、左の端の椅子にはラルソンがかける筈である。元より御馳走も極めて簡單な輕いもので、子供達は熱心に濃い牛乳を呑

み干して仕まう。カリンは快活な子供の騒ぐ有様を見て、目を輝して芝居へ行くよりももつと愉快であると云つて居る。

廿四頁を開けば「寢坊の朝飯」の繪が現はれる。ケルスチは寢坊をしたので、外の子供はもうすつかり朝飯がすんで外で遊んで居るのに、自分丈けは獨りしよんぼりと、つまらなさうな、今にも泣き出しさうな顔をして食卓について居る。

十頁はブリタがワッフルを食べる所である。「とうちやん、わたしワッフルを食べるのよ」左の手に大事さうに大きなワッフルを持ち、右の手で襟卷を握つて、椅子に深く腰をかけた爲めに兩足ともに床を離れてぶら〳〵させて、相變らずニコニコ笑つて居る。

睡眠

ラルソンの家庭に於ける最も愉快な光景は、子供の寢室に於いて見ることが出來る。カリンがこれを芝居と比較するのも偶然ではない。ラルソンは空氣の流通をよくする爲めに、平い天上をはづし、側窓を造り、前面の壁に小さな硝子窓をこしらへ、新しい窓掛けに繪を畫いた。五十六頁の右側の色刷の繪は、日曜の朝の寢室の光景である。左の方に立つて靴下をはいて、これからシャッを着やうとして居るのはリスベトである。右の方にもう衣裳をつけてしまつて、枕元の臺の上にあるものを取らうとして居るのはチルスチであらう。正面には奇拔な猫の繪の額がかけてあり。床には積み木細工やら着物などが亂れて居る。

六十六頁にも寢室の有樣が現はれて居る。正面の奇拔な額も、正面のガラス窓も、其の下の化粧道具も同じてある。右側を見れば、スサンネが寢臺から下りて、着物を着て立つて居る。やはり右側の手前には、ポンッスが未だ寢入つて居る。左側の寢臺の上はエブショルンが半身丈け起して

居る。丸机の上には人形が足を投げ出してあり、中央の椅子の上には、ヅボンやら、シャツやらが引かけてあり、床には玩具のお馬が立つて居る。

五十三頁の繪はブリタが草の上に轉がつて知らず〳〵ネンネをした處をいろ〳〵寫生したものである。十七頁の左側の色刷の繪（カリンとケルスチ）も寢室である。三十九頁のカリンの名の祝の圖もやはり寢室である。四十頁の右側の色刷の繪（カリンの病氣）も同じ寢室で、其他四十六頁のクリスマスの朝と云ふ畫も同じ事である。

勉めと遊び

云ふまでもなくラルソンは大なる藝術家である。そして藝術と云ふ活動は大體に於いて遊戯と共通な點があると云ふことも人のよく知る所である。これ故ラルソンの家庭に於ては一家を擧げて、父のすること、子供のすること、は、正しく歩調を合せて居る。畫伯のをこなひは遊びで有つて且つ勉めである。子供の活動には勉めもあり又遊びもある。

三十五頁を開けばラルソンの古い畫室卽ち今の小兒室の光景が現はれる。正面のガラス窓は窓掛を引いてあつて、一ぱいに光線が室に流れ込んで室をひたして居る。窓の中央にはボンヅスかウルフか、一生懸命に板に鉋をかけて、鉋くづが台の下に轉がつて居る。其右に床の上には紡ぎ車が置いてある。スサンネはもう糸を紡いでしまつたので、今窓の左の方でしきりに機を織つて居る。其後にはミシンがあり、室の左側には大工道具がならべてある。室の右の隅にはストーブに薪を澤山入れて、どん〳〵燃して居る。窓越しに寒さうな外の景色が見える。

三十七頁はやはりこの小兒室の一隅の光景でスサンネが糸を紡いで居る。こゝの記述は二十頁にも出て居る。

五十九頁の畫も二人の男の子が小兒室で學校の休みの間勉强をして居る處である。この繪は今年中は本誌の第一頁の上の方に出て居ると云ふ因緣もあるから、少し解說をして見ようと思ふ。ラルソンは其獨特のサラ〳〵した輕快な、浮いて流れるやうな、飛びながら走るやうな線を、この畫丈けには極めて規則正しく、卽ち幾何學的に用ゐて、上下の比例、左右の對向等に、云ふべからざる美しい感じを持たせて居る。餘り直線ばかり續いては曲がない。それで右と左にポンツスとウルフの可愛らしい後姿を見せて、しかもこれを對向に配置した。二人の形は各部分を注意すれば、皆それ〴〵變つた味を含めてある。曲線はこれのみでない。左の椅子の上の蒲團の線の面白さ、殊に窓の中央を見れば、鉢植の蘭のやうな草の葉と、やはり中央の丸卓子の上に一輪指しの孔雀の尾とが重なり合つて、云ふべからざる和らかな、しつとりと濕り氣を含んだ、なよ〳〵した形を見せて居る。窓の外は空が曇りなく晴れ渡つて、鳥の歌が樂しさうに聞えて居るらしい。この麗らかな快い外の景色を前に置いて、時々鳥の羽がきを羨ましさうに見入つて居る子供は卽ちウルフとポンツスとである。

卅九頁には、リスベトが寢台の上か何かで畫本を見て居る畫がある。

五十四頁は子供が敎會へ行つた畫が出て居る。僧侶の禿げた頭、白い鬚、疲せた頰、しまつた口、大きいしつかりした目、子供のふつくりした頰、無邪氣に半分開いた口、半は傍見をして居る顏、とり合せて面白い對照である。

六十四頁の右側の色刷の繪はケルスチがピアノを彈て居る所を描いたものである。この室は十六頁の右側の色刷の繪、卽ちラルソンが左の手にペンを持ちながら、ブリタを頭にのせた繪と同じ

造りであるから、恐らくは共にラルソンの新しい畫室の一隅であらうと思はれる。現にこの繪にも婦人が右の手を擧げた素畫が貼つてある。

ケルスチは今や偉大なるピアノに對して、足を揃へ姿勢を正して、覺束なげにヒ！フ！ミ！ヨ！……と音階の稽古を始めて居る。眼を一生懸命に譜に注いて居れば、動もすると手の方が御留守になる。かくして滿身の注意を譜と鍵盤とに集めた眞面目なケルスチの顏こそは見ものである。

十八頁にはスサンネが畫いた畫が出て居る。鼻の細長い葉卷をくはへたのはラルソンで、これと並んで居るのはカリンである、窓の左側には立木があり、其根の所には草花がある。煙出から立ち騰つた煙は中空に於いてラルソンの葉卷から出た煙と連結して居る。右の上の方には河が畫いてあつて、ボートが一艘浮いて、又水汲みのつるべが河のほとりに槓桿の仕掛に成つてさがつて居る。其河が忽ち逆落しに成つて、ラルソンとカリンと、家と立木と草花の下を流れて、其の逆落しの中途に奇想天外とでも云はふか、家と人間とが畫いてある。

六十三頁には、スサンネが椅子の上に立ち上つて、壁の上の方に何か畫を畫かうとして居る。

五十七頁の左側の色刷の繪はスサンネとケルスチとが台所に居る繪を書いたものである。正面の窓の向には光つて空と赤い屋根と黃綠の森とが朧ろにかすかに見えて、其の美しい光線が窓の上のレースや、窓側の白い鍋や其の他の器物に色の影を與へて居る。スサンネは、バターの道具を動かし、ケルスチはこれをおさへて居る。かまどの側にはハンスと云ふ猫が横向に座つて、何か熱心に動くものを見つめて居る樣が其の耳の形で知れる。

二十五頁の右側の色刷の繪は、やはりエブショ

ルンとケルスチとの二人が將棊をして遊んで居る所である。窓の外からは、春のほか〳〵した和らかい光線が、阿母さんの暖かい胸から出る息のやうに室の中に入つて、ガラス窓の格子や丸卓子の上や椅子のカバーや、プラットフォームや床を美しく色どり、殊に窓わきの花や草に美しい色の影を描いて居る。

四十一頁の左側の色刷の繪は、エプショルンの「名の日の祝」である。名の日とは例へば、子供のクリスチャン、ネームがマリヤならば、聖母マリヤは取りも直さず其の子の名親であるから、其のマリヤの死んだ日、即ち命日に其子の「名の日の祝」をするのである。この繪は今やお祝ひをする一行が梯子を登つて、將に式場（恐らくはラルソンの畫室であらう）に入らうとする光景を描いたものである。

この繪の左の方から見て行つて、戸の入り口で一行を迎へて居る、第一番目の人物は女中であらう。御馳走を臺にのせて運んで居る第二番目の人物も女中らしい。第三番目の父の燕尾服を引きずり、父のシルクハットの一端を冠り、胸に日向葵の花をさして、父の作つて呉れたお祝の詩を默讀しながら、進んで行くのはボンッスである。其次に立つて、白いお祝の着物を着て、花の冠をいたゞき、花束を持ち、笑を含みながらしとやかに歩を運ぶのは、當日の主人公たるエプショルンである。右手の上の窓から來た光線が、エプショルンの着物を淡青に、淡紫に、淡綠に、淡赤に色どつて居る。其の次に居る子はブリタである。扨てエプショルンの左に、將に梯子を登り切らうとして居るのはケルスチである。花の冠を被り、エプショルンの頭字を入れて造つたハート形の花環を式場でエプショルンに捧げやうと、しつかりと右の手で握りしめて、お得意の上目をつかひ乍ら

進んで行く。其の後に段の中程に中世式の武裝をしたのは、穿く靴の割合に、膝のあたりの小さいのを見れば、恐らくはウルフであらうか。ウルフは多分餘興掛りなのであらう。其後に梯子の下で外の光と河の水の反射した光とを受けて、ヴァイオリンを彈いて居るのは、僕のヨハンであらう。ヨハンの彈くヴァイオリンの拍子に合せて、子供の足はおのづとリズムをふんで動いて行く。

六十一頁を開けば人形芝居が見られる。カリンケルスチ、スアンナ、ポンツス、エプショルン、ブリタ、リスベトなどの似顔が窓の敷居のやうな處にならんで、右と左とには幕がある。

五十九頁は、誰かゝ和らかい芝生の上で踊つて居て、他の人には右の方に樹や草の茂つた柵の内側に集つて見物して居る所が畫いてある。家の外部は明るい光線を受けて、窓の下の草の上の丸卓子や椅子がカツキリとした形を示して居る。

四十五頁には活人畫がある。五十三頁にもスサンナが天使の眞似をして寢て居る妹の寢臺に腰をかけて居る。

五十八頁を見れば日の光をカン〳〵受けた戸の側にブリタと、もう一人男の子とが居る。ブリタは正面を向いて居るのですぐ知れる。向うをむいて居る男の子は、鍵穴から中の樣子を無邪氣に何心なくのぞいて居るのである。つま立てした足、ぶら下げた兩手、腰のまはりの形は非常によく出來て居る。又ブリタのニコ〳〵した顔は六十三頁のワッフルを食べる時の顔とはそつくりである。

七十三頁の左側の色刷の繪は冬の雪の日の遊びである。寒國の冬景色を御存じのない方には、恐らくはこの繪の面白さは十分に味はい切れまいと思はれる。綺麗な濃やかな見て居る人の心を吸ひ込むやうな感じが、この繪に溢れて、ラルソンの暖かさが雪景色の寒さを少し和らげ過ぎた位であ

る。今までどん〳〵降つて居た雪が少し前に歇んだばかりて、雪は枯木の枝や何かに、ふつくりとこんもりと丸みを持つて殘つて居る。煙突の煙も雪のやうに丸みを持つてむくり〳〵立ち騰つて、風のない穏やかな空は未だ霽れ切らないけれども日盛りに餘り遠くない太陽は雪國の習ひに從つて輪を冠つてどんよりとして光つて居る。この太陽の黄色な淡橙の光線と、少し霽れた右の方の空から來る青い光線とが、雪の上や凍つた河の上に入り混つて漲り漂つて、華美な配合の敷物の上に薄絹を被せたやうな雪國の美しい色を地上に染なして居る。小鳥は寒さうに、赤いラルソンの家の屋根の上に騒いで、殊にラルソンが拵へてくれた巣のまはりに群つて鳴いて居る。河の上では赤味の勝つた和かい光線に包まれて、子供が四人、二人はスケートを穿き二人は橇に乘つて遊んで居る。あとの二人の子供は河から登つて來る。前面に居て橇を押して後姿を見せて居るのはケルスチである。この本の開卷第一の畫は、やはり冬の日の子供の遊びを示したもので、丁度今の繪のスケルチを正面に向け直したものである。上目をする癖のあるケルチスが、阿母さんがつないでくれた手套をぶら下げて諸君の方を見つめて居る。

次は水の遊びである。四十九頁の左側の色刷の繪は女の子がラルソンの家の縁から釣をして居る所である。河を隔てた對岸の木や森や山や野原には、やうやく北國の春が立ち返つて來て、黄色い綠が輝くやうに萠えて、遙か向うには農夫が牛を使つて耕して居る樣も小さく認められる。右の方には人を乘せたボートが河に浮み、左の端にはラルソンの子供の乘り捨てた二艘のボートがつないである。

ラルソンは小舟に乘つて川をこぎまはつて子供が水を浴びる樣を見たり、又朝早く子供を寢床か

ら直ぐボートに連れて來て、水を浴びさせたりする。初めは小舟を漕ぎまはつて居るけれども、後には子供を水に投げ込み、自分も共に飛び込んで泳ぐ。夏はこゝら邊りが一等の水泳場であるから子供が數多く集まつて、或は舟の兩側にしがみついて平均をとつて見たり、殊更ら平均を外づしてボートをひつくり返したりして遊んで居る。ラルソンの二艘のボートは毎日貸し切りの有樣である。八月十五日には蟹が捕れる頃になるので、まるで新しい生活が始まる。ラルソンは網や錨を用意して、夜の十二時が打つとすぐに漕ぎ出して、まづ暗闇に網を下して歸つて來て、朝の五時まで寢る。五時には子供を皆起して一緒に漁に出かけて、獲物を澤山取つて漕ぎ歸つて來る頃には、太陽がそろ〳〵茅の茂みから登つて來る。

六十一頁にはカリンと六人の子供とが、舟に乘つて遊んで居る愉快な光景が畫いてある。ポンツスが二挺のオールを漕げば、ウルフはへさきに立つて何かどなつて居る。エプショルンは舟の中の水あかを汲み出してブリタは手を水に入れて居る。リスベトはおとなしく足をのばし、カリンはケルチスを抱て舵をとる。鏡のやうに澄んだ河は、水禽の飛ぶ影をあざやかに寫して、對岸の森も、其の近くのボートも皆この軟かい鏡の上に映つて居る。

六十六頁はラルソンの家の裏で、河のほとりにカリンと女の子が二人と合せて三人で茶を飲みながら菓子をいたゞいて居る所である。阿母さんが何か話をして聞かせて居ると子供はおとなしく熱心に聞いて居る。外は少し風が吹く。

五十二頁には、リスベトが河のほとりに立つて河の中に小魚に餌でもやらうとして居る所であるこの圖も今年中は本誌の表紙を飾る筈であるからやはり少し書いて見る。

リスベトが立つて居る草や、リスベトが見つめ

て居る水面の漣の線をよく見れば、悉く〳〵翼が生へて飛んで行きそうな勢がある。一々の線が動いて居る。一本々々が活きて居る。同じくリスベトの髪の毛も輕く自由に浮動して居る。其他木の葉にしても、家にしても、子供の衣服にしても、總じて輕妙な快活な樂天的なこの畫伯の氣質風格が悉く一々の線に表はれて、ラルソンとラルソンの畫の線とは渾然として離れ難い一體をなして居る。

この畫を本誌の一頁の上段にある二人の男の子の勉強して居る畫に較べて見て、又一入の面白さがある。前の畫は走らう飛ばう流れやうとする線を、強いて抑へて直線と直線とを組み合せて極めて平靜な落付いた形を拵へあげた、だから落付いては居るものゝ其のまゝ輕く浮いて動いて來さうな趣がある。この畫では輕快な線の運動が自由に遡しつて殊に草と水と髪の毛と木の葉に美しく現はれて、本來の活動を思ひのまゝに發現して居る。然しこの輕妙な線で畫いてあるリスベトの顔や手付きや足取りを注意して見れば、中々頑固などつしりした落付いた表情が十分にうかゞはれる蓋しリスベトは一家中でのしつかり者である、第一等の花形役者である。後に滑稽畫の所で精しく述べるけれども、リスベトは最も波瀾あり、光彩ある活動を爲しつゝある子供である。

子供の務めと遊びとが大體おしまひに成つたから、今度はクリスマスの記事をかゝげる。

ラルソンが明治三十二年に初めて出版した「家」と云ふ繪本を書き初めたのは丁度クリスマスの晩である。この本を書きながらラルソンは自分の子供の時の極めて單純な質朴な、しかし樂かつたクリスマスを思ひ出して、追想は遠い〳〵昔まで立ちかへる。

ラルソンの家では古い畫室卽ち子供の仕事室で

クリスマスの御祝をする。九頁にはクリスマストリーと繪の具棚の上の人形とが畫いてある。ラルソンは主人役で大きい椅子に腰をかけて皆にいろ〳〵な物を分ける、ストーヴには大束の長い材木がパチ〳〵と燃えて、室の中央には、今朝森から拾つて來た樅の木が綺麗に組んで立てゝある。三十八頁を開けば、(四十八頁の左側の色刷の繪にある樣に)ラルソンが鳥に對するクリスマスの贈物として、枯木に暖かさうな枯草を澤山かけてやつた圖が出る。鳥は悅んでこの贈物のまはりに群つて來る。四十六頁はクリスマスの朝の子供の寢室の光景である。子供が朝早く――未だ夜が明け切れないので蠟燭を三本つけてある。――眼をさましたら、昨夜サンタクロースがいろ〳〵な贈物を持つて來てくれた。ブリタにはコップの中に小さい御菓子を一ぱい、ウルフにはボート、ポンツスには帽子と劍、ケルスチには繪本、エブショルンには人形が置いてあつた。中にも一番遲く目を醒ましたポンツスは、シャツ一枚のまゝで、嬉しくつて着物を着る餘裕もないから、帽子を被り劍を拔いて寢臺の上に立つて居る。

七十二頁の右側の色刷の繪はクリスマスの夜の光景である。蓋しクリスマスの夜を最も幸福に過さうとする人は、善き心と善き胃とを持たなければならぬと、ラルソンは洒落を云つて居る。テーブルの前面にならんで居る七つのコップには、一〳〵子供の名が書いてある。例へば右から二つ目はリスベト、四つ目はスサンネのである。老人も、子供も、家僕も、ニュルンベルヒの人形のやうな裝束をした女中も、ストーヴの火よりも耀いた顏をして、猫のハンスも招ばれたさうに右の手を上げて居る。

ラルソンの家庭の生活の大部分を占めて居る子供の「務めと遊び」を大體說明すれば、紹介者の

重な任務が濟んだ譯である。しかし尙詩人であり畫家であるラルソンの溫かい同情で育てられたり描かれたりして、其の上ラルソンの子供の遊びのお相手となり保護者となりお友達と成つて、この家庭を一層美しくし豊富にし貴からしむるものは植物と動物とである。次に簡單にこれを說明する

植物と動物

植物のお話をするについて、先づ第一に申さなければならないのは向日葵の花である。屢々述べたやうにラルソンの家は太陽の家である、「日なたの家」である、そして太陽を象徵した花は向日葵の花であるから、この繪本に最も多く出て居る花はこの向日葵である。三十九頁のカリンの名の日の祝の畫にも、三十三頁の左側の色刷のスサンネの繪にも、四十一頁の左のエプショルンの名の日の祝の繪にも、五十一頁のエプショルンの畫にもこの本の最後のケルスチの畫の頭にも、皆この花が畫いてある。

七頁（九頁から逆に繰り上げて數へて）を開けば、スサンネが花束を持つて居る畫がある。其の下にラルソンの詩の句がかいてある。

三十二頁の右側の色刷の繪には、ブリタが花の咲いてゐる林檎の下につかまつて、遊んで居る所が畫いてある。

四十八頁の右側の色刷の繪には、エプショルンらしい女の子が、窓わきにならべた植木に水をやつて居る樣を描いて居る。明るい光が、硝子窓から溢れる程入つて、丸卓子の表面に反射して、尙更この室を輝くばかりに明るくして居る。

元來ラルソンがこの家に住んだ時には木も花もごく少なかつた。それでいろ〳〵苦心して鑛滓の丘を掘つて、良い土を入れ、そして白樺だの、菩提樹だの、栗の木、楊、白ぶな、伏牛花、其他はんの木、接骨木、林檎の木、素馨、薔薇、虎耳草

莓、小さい松などを植ゑ込んだ。二十頁の圖は小松を示したもので、冬に成ると材木を組んでこの小さい木を保護して居る。只この松が枯れたのみで、外の木や草は皆よく成長した。六十五頁の左側の色刷の繪にある白樺の事は前に食事の所に記してある。五十頁にはウフルが林檎の木の下に立つて居る圖が出て居る。

五十一頁にはエプショルンが小兒室で向日葵を取つて來て花瓶に入れた時の樣を描いてある、六十頁には花と裸に成つた子供とが畫いてある。

尙この繪本に現はれた動物もいろ〳〵ある。十五頁には鷄を追つかけまはすことの好きなカボーと云ふ犬が畫いてある。六十五頁の左側の色刷の繪にはボラウネと云ふ犬が出て居る。

又五十七頁の左側の色刷の繪と、七十二頁の右側の色刷の繪にはハンスと云ふ猫が畫いてある。

五十五頁にはリサと云ふ馬にウルフが乘つた繪が出て居る。

三十頁には牛、四十七頁には羊が畫いてある。

三十四頁には鷄、二十六頁には家鴨が、二十三頁には蜜蜂が畫いある。

ラルソンがこの家に住むやうになつてから、すぐ樹に箱を三つかけた。大きい白樺の木にかけた箱には、すぐ椋鳥が住んだ。二ッ目の箱にもやはり椋鳥が住んだ。三番目の箱には雀が巣を造つた又家の下には鼠と蟻とが巣を造つて居るらしいけれども、其處まではよく分らぬとラルソンも云つて居る。

三十八頁の畫と七十三頁の左側の色刷の繪とはラルソンが寒がつて居る小鳥を憐んで、枯木に温かい乾草を澤山かけて、鳥の爲めに愉快な休み場をしつらへて呉れた樣が描いてある。

滑稽畫

最後にラルソン獨特の輕妙な洒脫な快活な、し

かも材料を自分の家族の愉快な生活に取つた滑稽畫を說明して見よう。

二十一頁を開けば、カリンがラルソンの斬髪をして居る光景が現はれる。秋ももう晩くなつて、一家を擧げてスンドボルンからストックホルムへ歸らうと云ふ時、ラルソンは鑛滓の岡の上に登つて座をしめて居る。尖つた鼻、禿げた頭、ニコニコした顏。カリンの眞面目くさつた顏、鋏を持つた手つき、斬髪の姿勢。これを見て居るスサンネとボンツスとウルフとリスベトの顏やら姿やら、皆とり〳〵に面白く且つ其の特長を發揮して居る。尙この四人の子供の顏を十三頁の壁畫の肖像と比較して見れば一層興味がある。

六十八、六十九、七十と三頁に亙つて「そんなことをしやうものなら」、と云ふ題の滑稽畫が八ツ出て居る。

ラルソンは畫室でしきりに油繪を畫いて居る。カリンは傍でヅボン下を繕ろひ、ボンツスとリスベトが父と母のそばに立つて居る。

家族中の大立者たるリスベトは、父の眞似をしてこの油繪の上に指で何か畫かうと云ふのである。第一圖は繪を畫きながら、ラルソンがリスベトを叱つて居る所である。「リスベト、およし、これ油繪がまだ乾かないんだから。」

第二圖はリスベトが叱られて、すぐ手を降ろしたもの丶、人さし指は依然として、やはり畫かうと云ふ形を示して曲つたなりである。リスベトは怒つた顏をして畫架に後をむけて居る。ラルソンはせつせと畫いて居る。

第三圖、リスベトは隙をねらつて、又畫かうとする。ラルソンは右の手に畫筆を振りながら、リスベトを睨みつけて、「リスベト、そんな事をしやうものなら、時鳥がすぐお前をさらつて行くよ。」

第四圖、リスベトは自分の計劃を止めたもの丶

書きたくて〳〵たまらない。人さし指をぐつと曲げて目も眉も鼻も口も、いら〳〵させて居る。ラルソンは續けて一生懸命に畫いて居る。

第五圖、リスベットはいよ〳〵畫かうと決心して又もや人さし指を畫布へ向ける。今度はラルソンは椅子を離れて中腰に成つて立ち乍ら「リスベットこの畫に觸らうものなら、鶴嘴で一と打ちだぞ。」

第六圖、リスベットは思ひ返したけれども、留められると益々好奇心がつのつて、體が慄へる程である。人さし指はだん〳〵と上つて來る。ラルソンは尙續けて繪を畫いて居る。

第七圖、リスベットはとう〳〵腕をふるつて大きな曲線を畫いた。かうなると誰れも眞面目に怒つたり叱つたり出來るものではない。ラルソンは畫筆も刷毛も取り落して、ひつくり返つて笑ひ出すカリンはお腹をかゝへて笑ひくづれる。したりや、したり！　リスベットは尙つゞけて輕く指を動かして居る。

第八圖　リスベットは何をさせてもえらい。背景にはリスベットが指て曲線を引いた畫が畫架にかけて安置してある。前面にはリスベットが立つて居る。嚴肅な眼、高上りした鼻、緊縮した口、いづれもこの家族中の大人物にふさはしい。指についた油繪具がエプロンを染めて、自然に勳章を畫いて居るのも、たしかにこの小女丈夫の功績を讃して居るのであらしい。

編者白す。菅原學士講話のラルソンの此の畫集御所望の方は本月中に倉橋宛御申込み下さい。お取り次ぎ致します。但し部數により獨逸へ注文しますので多少日時がかゝるかも知れません。その點はお含み置き願ひます。